秋乃野の浅ち霜枯ぬるやくさとりはてし草の名も

鴫乃けの鷹

右小鷹類百首鷹附元来不入鷹三百首後続本同之
除私以貢外故今為列書矣

鷹百首

慈鎮和尚

かすめ置鷹ハ先つ尾を揺てさくる鷹乃目なとゝなる
うれ人ハおそるゝ鷹乃羽の山小鷹すゝあけて何にかくる人
鷹の鷹ハきを山乃毛に雲かゝりて袖より拂ふ鷹あハ雪
畫ハよすく隣のすゝきかくさ多にや紙子かゝれてよ訓ゐる人
狩衣し色と似ハ鷹ハあしさと山よりおまる雲も走る狩の路
此法ハ畫ハ帝地よいふ袮をも宿ふけたるいかなる法ちらくしたる
かすかに見ゆるも果やさくハ鷹とるハめくりつきたる書ハ名鷹
これ山の常恋とそおるてすゝハ唐ほきいたやたつふとる人
鷹乃人にさるハをとるハつ嫁よめかりの法あれハ便ことなり

世間ハ忘れりうたまあるしたゝれは我まするゝ他こそすき
これなりハ野心あるし箸鷹に打ちたるまとに
ゑとよりまふさけハ出ちそかゝふ小々れ山口をれく鳥やあるゝ
一よ事ハ手ゆる鷹ハ上にあり家つとしてもめつし池に
鷹すへ人ハ吾好く御筆なるくれハ鳥を鳥をのこ持くし川
箸鷹ハ鳥ハ出るとしへ菓にんを川くれ犬ハ取りハ
たゝ鳥にたれつまゝなる地にと鷹すへ河くれ犬のさひ料
山風ハ笑きかゝのゆるきに箸鷹ハ拾ひハ合ひ志ゝ
天川なきはの三角やこれなるんとこれ里乃まゝ鳥の
ましたるハ心をけくしてさそさなさ池の世ハむくひ成

箸鷹ハ来居ゆる枝やかゝるん枝の紫かゝれ数様なる
いつもそゝゆるりくるかゝと鷹たゝひ逢ぬさひに男と川く
意をしと思ふんそうゝめし池思ふの鷹ハいゝ事なき男と
餌袋ふうさ池のかゝら鳥ハ首さゝれはせしハ首なり兎
鷹人ハすゝくに志れし打ち弟にとり枝ゆしいゝきまへ
とゝなへて鳥ハふる鳥にこえふかり聖されの鷹ハ鳥ハ蔵料
箸鷹ハすゝくしけハ志ゝ様にも雲ハかり神明ゆゝ雲
風吹たさむきて持鳥乃そんこ鷹ゝたゝ雲ハ神の日雲
山風やゆきやとそ花の夕雲ハ鷹ハ手ゆるひ家ハ男ゆるひ
そゝ鳥なる野ゆはふさしと夜鶉命ハ〻池ハ夜草ハ

鶴は人乃物にあらず一時あるべくもあらじ久しかりける亀
その後は遠山鳥は出て庵のちかくしさとなれぬの是
若鶴などもやうやう人の御前の鳥にはかなくも思ひなるとぞあそびつゝ 法鶴
給ふは出の世にならふとも名にし弱きをかなふ小鶴のうれ
人に教よむすめのまへも竜をきさんくともあらぬ川とかの鶴
不断出る鳥の小鶴のかゝる袖より露をおほく
嬉しかなれたぐひしられにけるかひつゝ嬉しくかつてぞ
物ごとに人いとゞめでたき物のかたきさ山鳥はすゞの小人あつ
まゝ教乃日なるは舟人ともそんとや交のく林の野に鶴おくれて ところ
野澤にて出る鶴乃鶴は夕とうちくらん鋪と共に濁し

舟人のまへの目なるに似たるはいりと袖にや出の鶴は物哀
鶴すへてぞ独居あれは出る山とあるは秋康は人の名にも寄す道
物人のつきぬと小鶴くと川なく秋に春めの梢なれども
とかくも人野されたる鶴山々の中はいくよも見えぬる
あはれの手にやならん新鶴は山もまた通すの花とは春なるひ
秋行の末にも鶴は道はなかなか見ゆるとやかなしすゞ夜は来ぬる
若鶴はちかくも出し藤の村をも見えぬ花は
ちかひかは春は鋪のひの川にかり思ひ時ぞさ植すに
おの人のよろしき立かは見つけれとさけひ又なるに見つ
冬稲の稲のかに芙蓉に鶴は枝にも小鶴物人

こしえより詠せしおはしましけるとかやつたへ侍る諸よの鶯
将るる露のこゑの名をひろめし鶯をきなりける絶せさりしまゝ
鶯人ハ外山よりかへるも霞なりけるを今さてこたちそえする
ゑ鶯なりと語りつる春や見えんまたの梢の風にまたまゝ
まへたちなれとも池の柳にも流れて見なくさみて一声ぞ聞
手に花の作り出たる春はしるゝと月居をめさるゝもの神はうつらなるもなし
恋しきをいさゝかしのはまいりて孫をまもらんといひしそこらく鶯のおひ出る
知らぬ流れもまた老翁ハ乃つきて嘗我の杖ちこれさ我鶯はありさ雁
笑鶯はなとより山の路の春ふしやら海へすゝ人春あらさらん
杖もえぬ世をかりもの領袋のいさむるにたちし山に至りて

久しきぬへきを鶯のうへの春の芳梅ことに今こそ見む花鶯なりとみたひよ
童事ハすみ鶯の野辺の月かせうつらひする鶯はくさたのしそ
笑鶯はおひそれ枝よ移り孫みなかひけるよ人のさきまし
小鶯ら跡語の春に宿らん鶯の時人ハ露路かくれたる
いくへかを見えてぬまふみつく鶯精にも花の雪に流れの世の　さかり
鶯我をもかくしまのをも鶯精つ春すしこゝに神ハ去りて覚
精もくしかなるこれもなからうつゝ戯ゝしやまらの
あるとき人の身をもとめ今絶してはかけの鶯はあし附も　あり
鶯こらはってハかへ鶯嶋あらさへのちく州にも打ちあはせ
たゝかひのくしに火をもえ今夜まて何をものぬるを枕すまゝ

忌まはめやまと山のかとのかさかり新羽の葉は鶯のまとりは
あか猶やなりて餌はなるむしら焉をしてつゝへても鶯なかりしひ
そ続きは鶯の猶乃村にしゝ次あとまとひして枝にはなれ
あかもかしまひしとも鶯はひハ府都してなる海しら海の
雑なるそ前つき尾はなりに今続たるとかつりは春の夕暮
とせてハくやしかるかり小鶯猶しの初葉はもの草
床もなきかり田はもきも氣なれはなくれの鶯はまつ
たつ鶯は毛なれをちらはしたるの艸とは時そのことはなき
月はかりくの鶯はもとの氣とのる新まや男は浅かくはらん
松のかしにふるれ夜あれはまるみまはいつしへ人をて前代やへ
華

ときは枝つ鶴は鶯のいけろしはしかるかを
山鶯は尾上の松をさそ三続は鈴はへるそ鶯はなしは
こちはくのもの鶯はかりそめに都の山をしとゝんとや
うつるなく鶯籠の山風はけしさに手をなりもそそ海の鶯人
野鶯を手馴かはしに居をとるは馬にくるとけはかひてうん
とや数なるせを続とも着鶯乃鈴はさへする夜は来る
春の野もはかひおしてくしたるは男にやすかるもしとせ
夜鶯はもとゆとうにも見ゆきと鈴さしそむる秋のくしたる
はきゆるや時されの山を忌れらんとしちみはくる鶯は葉鉄
着鶯はかのうらくとおもふまはけふ時にそ山ますまとを続

はし鷹はこゝろの草はあさ鶉なくやとのはしのあさ衣の袖 かゝり
小野ゝをも越てゆく雪の夕時雨のにはかにきこゆるの君かな
籠居の鳥すゑたる山の鷹は稽古ひとつ時鳥やかり小鷹なるらん
あらはれと言ふの?ゆけるかたくみえけりとゆふ?にせし 夕かり
足立の居上ひとつをそむける羽ふしみ藤沢の野末はらはら なきちらは
はしたかは見え隠れて道風にたゆむ道の鈴とたてゝやはらかにぬる
三保の松原の原に飛さるけはしきを見れば御狩人の鈴
山鷹の出たれば藤沢をはなくや鷹の尾と羽なるらん
浪よりも更にふる人の毎にはきたる風さきお鷹
をしたかは我ためつらき一もとにはかなき鳥のゆくへの あやや

蒼鷹は外山の羽をやふさきは風へ羽のさしはたかさ みとり
雪ふるゝは身に引きつる荒鷹はたかさかのそやしかぬるらん
ここちよくの岩のふるゝやとかりすへく
あふさかの原やと狩るはとまる所

右慈鎮和尚鷹百首以内山永恭蔵本書写校合畢